

第35期第5回研究会「メディア考古学の展望」（メディア史研究部会企画）終わる

日時：2016年5月14日（土） 15時00分～17時00分

会場：同志社大学今出川キャンパス 徳照館1階会議室

問題提起者：赤上裕幸（防衛大学校）

討論者：大久保遼（愛知大学）

司会：白戸健一郎（筑波大学）

参加者：25名

記録執筆：白戸健一郎

近年、メディア考古学に関する研究が蓄積されつつある。しかし、その方法論や分析手法、メディア考古学が切り開く学術的意義、さらにメディア考古学という分野が生まれた背景については、なお共有されていない点が多い。こうした問題意識のもと、本研究会では、『ポスト活字の考古学』（2013年）を公刊しメディア考古学や仮想歴史学（ヴァーチャル・ヒストリー）の研究を行う赤上裕幸氏に、大久保遼氏の『映像のアルケオロジー』（2015年）を素材に問題提起を行ってもらいながら、近代日本の映像文化史をメディア考古学的に考察することの意義、歴史記述におけるフィクションの扱い、映像メディア以外のメディア文化への応用可能性について議論を行った。

まず、赤上氏からは、大きく次の三点が課題として提起された。第一に、メディア考古学の現代的意義や有効性についてどう考えるのか、第二に、メディア考古学はポストモダンの手法と類似のものなのか、第三に、資料としての映像にどう取り組むべきかというものであった。

これに対し大久保氏からはかつて想像された未来がレトロなものとして現代文化において表象・想像されていること、また、情報社会やテレビなどのかつての「夢」と現在との差が観察可能になったことで、「情報社会の夢」に含まれていた可能性や実現されていない未来像が再びオルタナティブな有効性を持ち始めていること、さらに、メディア考古学の発生がメディアアートやアーキビストなどによる実践との連動から生まれたものだという指摘がなされた。

フロアからは、映像文化を対象とするメディア考古学研究が多いのはなぜか、なにゆえ「考古学」と称するのか、フーコーやキットラーの理論的影響を受けているからとするならば、それはどの程度なのか、メディア史研究におけるマス・コミュニケーション理論をいかに位置づけるのかといった点について活発な議論がなされた。

メディア考古学に関する多様な論点や基準点が浮き彫りにされたが、そのことは今後も蓄積されていくであろうこの分野の可能性を感じさせるものであった。